卓球ダブルスにみられる自己卑下克服への道筋

1250453 阪拓海

指導教員 中村直人

研究背景

卓球の戦術について分析した研究や技術指導を目的とした指導書の蓄積はみられるが、卓球ダブルスをパーソナリティの領域から分析した研究は少ない。ダブルスは2人の選手によるコンビネーションが勝利条件に不可欠である。一方、プレーの結果によっては自己を卑下する思考が生じ、適切な判断が阻害されることで競技パフォーマンスを落とす選手がいる。したがって、技術中心の戦術分析だけでなく、心理的側面から分析したコンビネーションの促進について検討する必要がある。

研究目的

本研究の目的は、卓球のダブルスで自己を卑下してしまう選手の克服方法を明らかにすることである。卓球ダブルスで自己卑下を誘発するプレー場면을調査し、自己卑下傾向にあるパートナーをどのように支援していくかを検討する。

研究方法

体育会系卓球部に所属する大学生 220 人を対象に、Rosenberg 自尊感情尺度(Rosenberg Self-Esteem Scale; RSES)の日本語版 RSES を用いて、自尊感情を調査した。また、筆者が作成した卓球ダブルスにおける自己卑下傾向調査票(Self-Deprecation Tendencies Questionnaire in Table Tennis Doubles; SDTQ-TTD)を用いてダブルス中の自己卑下経験を調査した。自尊感情得点と自己卑下得点の相関を分析して克服方法を考察する。

分析結果

日本語版 RSES と SDTQ-TTD の間には有意な中程度の負の相関が示された($r=-0.672$, $p<0.01$)。また、同じパートナーと連続して試合に出場した回数が 1~3 回のペアと 10 回以上のペアの SDTQ-TTD 平均値間で有意な差が認められた($t(87) = 2.13$, $p<0.05$)。10 回以上同じパートナーと連続して試合に出場している選手の方が自己卑下得点は小さい。

考察・結論

卓球ダブルスで自己卑下な思考をしてしまう選手は、同じパートナーと連続して試合に出場することで克服することができる。そのなかでパートナーおよびコーチは、選手の性格に適した声かけや態度での支援に努める必要がある。また、プレースタイルに応じた役割分担を決めて戦術を組み立てることで、試合中の自己卑下は軽減可能である。